

# 耕縁白豊

NO. 65 西畑亮一

今月もまた、急遽脱線することになりました。と言うのも、8月29日(日)23時から毎日放送で放送された「情熱大陸」を見たからなんです。こ

の番組は、毎回、天職とも言えるような仕事に情熱を持って取り組む人物を、仕事で見せる顔とは違った角度からの表情も混ぜながら紹介してくれる番組です。番組のテーマ曲を聴いただけで、心躍る方も多いのではないのでしょうか。29日に紹介されたのは、コスタリカ在住の探検昆虫学者で、大阪府松原市出身の西田賢司さんでした。西田さんと私は、少し似ているところがあったんです。西田さんは山で珍しい虫を求め歩かれていますようですが、私は小学校2~3年生頃の夏休み、市川支流の川原で水生生物を観察していました。それは、学校が課題として与えた自由研究ではなく、自ら見つけた自由な研究でした。あの時の自由研究は、西田さんの昆虫への想いとかかなり重なる部分があると番組を見ていて感じました。もしあの頃の調子でそのまま私も歩んでいたら、きっと今頃、市川流域の自然環境を保全しつつ西田さんと同じような仕事をしていたかも知れません。

私がどのように観察していたのか、簡単にご紹介しましょう。まず川原に出て、半分ぐらい水に浸かっている十分に自力で動かせる適当な石を見つけます。この石の裏側、見えてない世界はどうなっているのだろうかと思ってしまうんです。一通り想像してから石をゆっくり静かに持ち上げ、水に濡れていた裏側を舐めるように見ながら横に置きます。乾燥を少しでも防ぐため、麦わら帽子を脱いでその石に被せます。石のあった所には石の水に濡れていた部分に相当する大きさの窪みがあり、すぐは濁っていて何も見えません。その真上に身を乗り出し、息を凝らしながらジッと待ちます。暫くすると、濁りが引いて石の下にあった世界が登場します。私は水面ギリギリまで顔を近づけ、目だけキョロキョロ動かしながら小さな生き物の動きを追いかけます。石によっては、下に蟹や小魚も住んでいる場合があります。見たことのある生き物やないもの、その色、模様、形、大きさ、動き方、体のどこがどう動いているのか、まるで時間が止まっているかのように観察しました。その時の私の気分は、万有引力を命名したアイザック・ニュートンがその偉業を称えられた時の「砂浜でキレイな小石や珍しい貝殻を偶然見つけて喜んでいただけ」と同じような気分でした。観察が終わったら、横に置いた石を元の位置にゆっくり静かに戻します。それで一件、でなく一石落着となります。私は一仕事終えた職人さんのように満足気に深呼吸してから、新たな想像を掻き立てる次の石を物色し始めるのでした。

西田さんは、大切なのは多様性で、人間を含めすべての動植物は虫の存在を・・・無視できない。こんな誰もやらないようなことをやっている人間がいるからこそ人気の職業も生きるんだ、と言ってくれています。また、新しい種の発見は、この宇宙における新しい生命の発見でもあると。それらのことから、私たちが新しいと認める種類を受け入れることは、人間にとっては新しいその生命の意味を、役割や欠かせない働きを、知らなかった人間が、実は世界はこのように調和して成り立っているんだと知らされることでもあると気づいたのです。「手のひらを太陽に」という歌に、ミミズやオケラやアメンボたちがみな友だちなんだという歌詞があるように、実存するどのような生命もすべてが協力関係にあるということじゃないのでしょうか。私たちは何かに託けて争い傷つけ合っていますが、戦争責任を感じて新聞社を辞めた武野武治さんやアレン・ネルソンさんの「私たちは助け合える」という呼びかけの中に、現在の人類が課題とすべきことへの重大なヒントが秘められているという気がしてなりません。それは、公権力の無謬性でも、改善された生産技術や新しい販売促進のアイデアでもなく、それらを従えて困難な課題の最後の扉を開く鍵となるのは私たち自身の私たちらしさ、未だ意識化されていないけれどけっして無視できない虫にも通じる万人をして求め合い引き合う人間性ではないかと思うのです。



## ミツバチの羽音 PART1

映画の仕上がりが観ないで、待っていた鎌仲さんの映画だから早々に上映を決めた。六ヶ所村ラブソディーから4年。その前には「ヒバクチャー世界の終りに」。その持続される意思是、ミツバチの羽音と地球の回転で世界を一周した感じ。

1999年NHKBSで放映され反響を呼んだ、「エンデの遺言ー根本からお金を問うー」も鎌仲さんのプロデューサーだ。「はてしない物語」や「モモ」を書いたドイツの作家ミヒヤエル・エンデにインタビューした貴重なドキュメンタリ

一。お金が何であるか、お金によって何が失われたのか、大事な、痛いことを提示しながら、それならこれからどうすればいいのかと導いて、希望を感じるさまざまな取り組みを紹介する。「ミツバチの羽音と地球の回転」もまさにこの感じ。本当にいばらの現実を網羅して…。謙仲さんのまなざしははじめからずつと変わってはいなかった。

エンデの小説「モモ」には、モモという小さな女の子の、どこまでも奪われないまなざしのがずつとある。このまなざし、どうしたら持ち続けられるだろう…。モモはどこから来たのか街外れの公園で一人暮らし。街の人と交流しながら暮らしていたけれど、ある日灰色の男たちが現われた。ゆとりある生活は時間の無駄遣いだから時間を貯蓄しなさいと説得する。人々はどんどん時間を貯蓄し始め、しだいに不機嫌に、怒りっぽくなって、モモと話す暇もなくなってしまふ。それはまさに文明社会、貨幣経済社会に暮らす私たち。モモは灰色の男たちが時間泥棒であることを知り、立ち上がる。カシオペアという亀と共に時間を人々に取り戻す…。人々にはいいことが与えられたようで、大きな何かを奪われてしまった。それが何かがよくわからない。

エンデは時間とお金をおきかえて、利子が利子を生む貨幣経済システムがいかに人々から奪っているかを伝えている。暮らすのにお金が一番大事っていうことが本当に変なんだ。本当は澄んだ水と空気と、新鮮な食べものが私たちには欠かすことのできないものなのに、それを得るのにお金がいる。逆にお金さえあれば得られる。本当は海山自然からいただくものなのに、私たちはお金がそれを自分に与えたと勘違いする。だから一番にお金を稼ぐために時間を使って、大切な環境を守るための時間がない！本当におかしなことだ！

謙仲さんは数年前にこう言っている。「『地域通貨』は利子のないお金、限定された地域の中でだけ使われる物やサービスの交換の道具だ。小泉政権の経済政策によって日本の経済はグローバル化、つまり利子をむさぼるお金がよりいっそう流入し、私たちの暮らしを脅かすようになった。地方への財源もカットされ、破綻する自治体も出始めた。地域経済の破綻が現実となればわたしたちの暮らしそのものが追い込まれていくことは明らかだ。」(町田大福帳 HP より)

2010年まさにその通りの社会を実感する。生活の中で実感するグローバル経済。外資系の大手のスーパーが日本のあちこちに居を構える。何年かそこへ足を運んで寒くなった。クーラーの効きすぎ…だからじゃない！はじめは同じ種類の品物でさまざまなメーカーのものが置いてあった。その中にそのスーパーのブランドがかなり安い価格で並んでいた。でもやがて売れ筋の品物は日本のメーカーのものが無くなった！独占だ。安い値段だけでなく小売りで締め出せば、日本のメーカーは太刀打ちできない。かつてスーパーが小売店をつぶし、今度はグローバルスーパーがスーパーをつぶし、同時に国内のメーカーを潰す。

本当に何も分からずに暮らしていた私。その私に大事な情報が届くまでさまざまな人の歩みがある。それがミツバチの羽音。謙仲さんが映画をなぜこんなに長い題名にされたのか、少しわかって来た。buzz communication ロコミの大切さ、ミツバチが足しげく花と花を飛び回り、美味しい蜜と花粉を楽しく集めているように、私のロコミ全開！情報を受け取り、伝える。私の今すぐできること。

はりまパワー通信2010年秋号より

## セブンジェネレーションウォーク交流会 in 姫路

8月25日、山口県の祝島から COP10の開催される名古屋まで『7代先の子供たちの事を考えて今を生きよ』という インディアンの教えのもとに歩いていらっしやる『7Generations Walk』の皆さんが、9月20日に姫路に入られます。活動の目的が『持続可能な未来社会の価値観を見出したい!』と私たちと同じ想いを持たれているのを知り この機会にぜひ、交流会を持ちたいと思いました。7 Generations Walk (代表 山田俊尚)

■日時:9月20日(月・祝)午後4:00~6:00

■場所:納屋工房 兵庫県姫路市本町68番地 大手前第一ビル4階 電話 079-263-7878

■参加費: 1000円(1ドリンク付き) 地域通貨パワー券(2POWER)+800円も可  
(余剰金が出ましたら、7gwの活動応援に使わせて頂きます) 主催ピースチェーンはりま

### 「ミツバチの羽音と地球の回転」上映情報

10月9日兵庫県民会館 けんみんホール神戸市中央区下山手通4-16-3 078-321-2131 【プログラム】開場14:00 上映 15:00 ☆上映後、謙仲監督トーク【参加費】1200円【主催】祝島サポーターズ神戸 大阪シネ・ヌーヴォー(大阪市西区九条TEL06-6582-1416)にて10月9日より二週間毎日一回上映